

たより



平成28年2月29日発行
伊勢市教育研究所
伊勢市小俣町元町540番地

小学校から中学校への接続を円滑に 中1ギャップ解消に向けた小小連携・小中連携の研究実践報告

平成28年2月23日（火）、不登校対策ハーモニーハート総合推進事業の研究委託校である早修小学校と城田中学校による研究実践報告会を開催しました。当事業では、不登校を未然に防ぐ取り組みやネットワーク体制の研究を行っています。本年度、委託研究を受けていただいた早修小学校からは、加藤 眞弓校長先生が、中1ギャップ解消に向けた宮川中学校校区の小小連携と地域連携についての取り組みを報告してくださいました。また、城田中学校からは、谷口 北斗先生が、中1ギャップ解消に向けた城田小学校との小中連携についての取り組みを報告してくださいました。

中学校への進学という、学習や生活が新しい環境へ移行する段階で、つまずいたり、学校へ行きづらくなったりすることは、いわゆる「中1ギャップ」と言われています。伊勢市においても、不登校児童生徒数は、学年が上がるにつれて増加していき、特に中学1年生で増える傾向があります。その要因や背景は複雑で多様ですが、教育支援センターに相談に来られる保護者や中学生から、入学後、自分なりに一生懸命頑張ろうとしたけれど、試験や宿題等の提出物、クラブ活動、行事などのプレッシャーに疲れてしまい、自信を失ってしまったという悩みを受けることがあります。また、新しく出会った友だちや先輩と、うまくコミュニケーションをとれないという悩みが語られることもあります。小学6年生の中には、中学校に進学することに対して期待がある半面、不安を感じているという子どももいるでしょう。早修小学校と城田中学校では、子どもたちが少しでも安心して中学校に進学し、次の環境にスムーズに移行できるよう、工夫を凝らした取り組みがなされました。

早修小学校の小小連携の報告の中に、宮川中学校に進学する小学6年生（早修小学校、中島小学校、佐八小学校）が、陸上記録会に向けて合同練習に取り組んだ実践がありました。共通の目標を持った子どもたちが共に練習しているうちに、互いに励まし合ったり、讃え合ったりしながら仲良くなっていったということです。陸上記録会当日は、再会した子どもたちが互いに挨拶を交わし、応援し合う様子がみられたとのことです。3校の子どもたちは、宮川中学校区青少年健全育成協議会の「親子ふれあいまちつき大会」でも、楽しい交流の時を過ごしました。

子どもたちは、この春、中学校で同級生になることを楽しみにしているそうです。



宇治山田商業高等学校での陸上合同練習の様子



青少年健全育成協議会
親子ふれあいまちつき大会



指導して下さったのは、宇治山田商業高校の小池弘文先生（ソウルオリンピックに出場した選手。早修小学校・宮川中学校出身）、同校陸上部の山本顕先生、床辺敦紀先生、三重陸上競技協会の出口義人先生、松葉清高先生。



城田中学校は、中学校で本格的に始まる英語科に苦手意識を感じてしまったり、異学年と豊かな人間関係を築けず、部活動でのトラブルが不登校につながったりするケースがあることから、「教科の学習活動・体験活動を中心とした小・中学校の交流・連携について」というテーマで研究実践に取り組みられました。

中学生との交流や中学校生活の一部を実体験できる機会として、学習やレクリエーションを通じての交流、部活動の疑似体験も含めた運動活動、地域の行事を通じての交流など、様々な取り組みをしていただきました。中学の先輩に教えてもらいながら、楽しく国際交流や古典学習を体験したことは、子どもたちの学習意欲を高めることにつながりました。そして、小学生とのふれあいは、中学生の自尊感情を高めることになりました。谷口先生からは、こういった取り組みを通じて、小学生が中学校での生活や先輩となる中学生に安心感をもてたこと、この安心感が中学校に入学後の人間関係を構築する上で、また中学校生活に適応する上で重要であるのではないかと報告されました。



【中学2年生と
小学6年生の交流】

鈴鹿大学に在籍する留学生を招き、言語・文化の学習を行いました。1時間目は韓国、スリランカ、モンゴル、ネパールについてのお話を聞き、2時間目は、小学生と中学生が2～3人の組になり、ブースに分かれて言語学習を行いました。



【古典文学（百人一首）】

中学1年生が小学校に出かけ、6年生と百人一首大会を実施しました。小学生に気配りをする中学生の姿が見られました。



宮川堤の
合同清掃



新入生オリエンテーションで保護者と児童にコンピュータリテラシー講演

教育支援センター NEST の体験活動 ～書道体験～

毎年、NEST では年明けに書き初めをしています。今年も1月15日に、書道家の飯田祥光先生を講師に招き、書道を教えていただきました。今年は申年ということで、筆の基本的な払いやはねを実感するため、先生の指示に従って筆で色紙に申の絵を描きました。先生の説明をよく聞き、一筆一筆丁寧に書いて仕上げました。



その後、全紙を12枚つなげた大きな紙に、飯田先生が太い筆で「猿」という漢字を書いて見せてくれました。「猿」という漢字の旁（つくり）の部分には、平仮名「さる」の隠れ文字が入っています。

子どもたちもその大きな紙に、自分の好きな言葉や文字を書きました。完成した作品は、小俣総合支所3階の廊下に掲示してありますので、お越しの際には是非ご覧になって下さい。



「陶芸体験」「潮干狩り」「相可高校 村林先生御指導のものと調理体験」「ヨガ体験」「宿泊体験」「みかん狩り」・・・ NEST では今年度、様々な体験活動に取り組みました。このような経験や活動、交流を通して、自主自立の力や集団への適応力を身につけ、自信や自尊感情を高めることができると考えています。これらの体験活動は、NEST 通級生だけではなく、市内の登校しぶりや不登校の児童生徒にも参加を呼びかけているものがあります。今後も、学校と連携をしながら、有意義な体験活動を計画・実施していきたいと考えています。

第3回 不登校児童生徒支援委員会を開催



平成28年1月28日（木）、第3回不登校児童生徒支援委員会を開催しました。

不登校児童生徒支援委員会では、各校の委員の先生方と教育支援センター NEST が共に不登校について考え、子どもたちにどのような対応や支援をしていけばよいかについて考えてきました。年間に3回開催しましたが、いずれの回も、皇學館大学 教授 渡邊賢二先生をお招きし、講演や助言をしていただきました。

第1回目は「心理教育の理論と実践」という題で渡邊先生の講演とグループワークを、第2回目は、架空事例を用いたケース会議とチームアプローチをテーマに研修を深めました。今回は、本年度最後の開催ということで、教育研究所の村木研修員による研修報告を行いました。



村木 俊一 研修員による研修報告（概要） 「小学生の不登校～未然防止と早期発見に向けて～」

伊勢市において、不登校児童生徒の人数は、ここ数年横ばい状態です。しかし、内訳を見ていくと中学生の不登校は減少傾向に、そして小学生の不登校の増加が目立っています。



市内の小学生のうち、不登校傾向のある子どもたちの hyper-QU のデータを集め、分析をした結果、「学習意欲の低下」「非承認感」「対人関係におけるかかわる力の弱さ」の3点が明らかになってきました。このような特徴をふまえ、分かる授業の実践や工夫、学級での居場所づくり、コミュニケーション力を高めるための活動など、未然防止の対策をとっていくことが有効です。

不登校の要因や子どもたちの背景は様々です。その子によって、対応や支援の仕方が違ってきます。目の前の子どもの状況を把握し、多くの人に関わって、どのような支援や配慮が必要であるかを検討していくことが大切です。適切な支援や合理的配慮によって、不登校に至らないケースはたくさんあると思います。今後も学校、家庭、教育支援センター、そして関係機関が連携を密にして、どの子も安心して元気に登校できるように支援をしていきたいと考えています。

※村木研修員の研究内容につきましては、伊勢市教育研究所「所報第19号」で報告します。

助言者の渡邊先生は、「不登校をはじめ個々の児童生徒の状態、また人間関係や学級集団の様子を把握するとき hyper-QU は大変有効であるけれども、子どもたちの心の状態は日々変化するものであり、hyper-QU の結果を全てだと思っはいけない。あくまでも一つの指標として活用してほしい」と話された上で、次のように助言してくださいました。



皇學館大学 教授・渡邊 賢二 先生の助言から（一部）

村木研修員が、不登校傾向のある児童の hyper-QU の特徴を報告していたが、特に「対人関係におけるかかわる力の弱さ」の部分で、ソーシャルスキルが身に付いているか、いないかという点が非常に大きい。学校生活においては、ソーシャルスキルがベースにあって、ソーシャルスキルが身につけている子どもは、意欲も高いし満足度も高くなり、全体的に他の数値も高くなる傾向があると思う。反対にソーシャルスキルが身につけてないと、他人とのかわりが上手くいかずに孤立感を感じやすい。そして承認感も低くなり、学校に出にくくなっていくという負の連鎖が想像できる。

伊勢市の不登校の数の報告もあったが、「数だけで何が判断できるのか」という考えもあるだろうが、その通りで一人ひとりの様子や状況がちがうわけで、数ばかりに目を奪われてはいけない。しかし、他の自己申告の事柄とは異なり、不登校の数には虚偽がないことも踏まえて対処していく必要はある。

不登校は深刻な問題ではあるが「長い人生の中で、今ちょっとつまずいて休んでいるだけで、何かのきっかけできっと前に進むことができる」という大らかな気持ちを持つことも大切である。

アンケートでは、たくさんの感想やご意見をいただきました。

来年度、さらに意義のある「不登校児童生徒支援委員会」に発展させていきたいと考えています。各校の委員の先生方、一年間ありがとうございました。

